

フラを通して考える：本質主義と構築主義

ハワイのフラは、フラ・アウアナ（近代フラ）とフラ・カヒコ（古典フラ）に分類される。フラ・アウアナは、コンテンポラリーな音楽とギターやウクレレの演奏に合わせて、ドレスを着た女性やスラックス姿の男性が踊るもので、1930年代以降、観光産業の中で発展してきた。一方、フラ・カヒコは、チャント（詠唱）とパフやイブ・ヘケといった伝統的な打楽器の演奏に合わせて、スカートや腰布を身につけた踊り手が踊る古典的なフラである。「陽気な君主（メリー・モナーク）」と呼ばれたカラーカウア王が1870年代に復興したフラをその起源とする解釈もある。

「伝統は古いものである」という従来の伝統概念に再検討を迫ったのがホブズボウムとレンジャーによって編まれた『伝統の発明』（邦題『創られた伝統』）であった。「伝統の発明」論者に倣えば、フラ・カヒコは19世紀末に発明されたフラのジャンルということになる。彼らの視点に立てば、歌詞内容、楽器構成、振り付け、踊り手の服装などを歴史的に検証すれば、客観的にフラ・カヒコの誕生について解明できることになる。前回、私はこのような「伝統の発明」論者の視点を「客観主義的構築主義」と呼んだ。

メリー・モナーク・フェスティバルはフラの最大の競技会であるが、そのミス・アロハ・フラ部門で競技者が伝統に則ってトップレスで踊ることを認めるかどうか、かつて議論されたことがあった。このように「正統な」伝統への指向が当事者にもあることを考えれば、構築主義の視点に立て「フラ・カヒコは、19世紀の終わりに復興されたフラであり、踊り手の服装からしても、『本当の』伝統的なフラとは異なる」と指摘することは可能だろう。しかし、このような視点はややもすれば「伝統」の真贋を問う視線を生み出してしまふ。

構築主義者が伝統の創造性に止まらず、伝統の正統性にまで踏み込んで、その主張をフラ・カヒコに対して行えば、フラの継承者からは当然のことながら反論が返ってくるはずだ。神々を敬い首長を讃え自然に感謝するというのがフラ・カヒコの核となる精神であり、それは太古から今に至るまで不変であるという本質主義的な反論である。しかし、文化には、時に応じて作り替えられる側面と時が経っても不変であり続ける側面があり、またこの2つの側面は密接に結びついている。フラ・カヒコに対する構築主義的解釈と本質主義的解釈は、文化のどちらの側面に焦点を当てるかという問題と捉え直すこともできるのだ。

ポストコロニアルな状況における論争

フラなどの伝統芸能のように実体的に捉えることのできる文化（前回言及した第1の文化）であれば、このように本質主義と構築主義の間に落とし所を見つけることはできるかもしれない。だが、文化アイデンティティや伝統的価値観といった概念論的に捉えられる文化（前回言及した第2の文化）の問題となると両者の対立は深刻なものとなる。過去や伝統の解釈、その解釈に基づいて形成されるアイデンティティや価値観は、表象や言説の領域に属する問題であり、客観的に同定することが極めて困難であるからだ。

例えば、「アロハ・アーイナ（土地への愛）」というハワイ人の伝統的価値観と「土地に深く同一化し自然をいたわる人間」という彼らのアイデンティティについて考えてみよう。人類学者が「伝統から最も遠く離れたところにいるネイティブのエリートが、政治的な意図を持って、過去や伝統を神話化し、それに基づいて先住民としてのアイデンティティやその価値観を前面に打ち出している」と指摘したら、ネイティブの人々はどのように反応するだろう。過去や伝統を目的や状況に応じて都合よく読み替えているというこのような構築主義（道具主義・状況主義）的主張に対して、彼らは人類学の持つ学問的権威性を見抜き、人類学は自分達に対する植民地主義的な企てであると批判するのではないだろうか。

これが、1980年代末から90年代初頭にかけて人類学者とハワイ大学のハワイ人教授との間に起こった論争であった。「本物の」伝統について知っているのは我々であると考え一部の人類学者に対し、ネイティブの伝統には不変の本質的な部分があり、それを分かっているのはネイティブだけだという戦略的本質主義に基づく反論がネイティブの側からなされたのである。

それは丁度私がハワイ大学の大学院に留学していた時期であった。ハワイ研究学部のトラスク教授が人類学部に入っているポルテウス・ホールにやって来て、“What Do You Mean ‘We,’ White Man?”と題する講演を行い、ハワイ研究を専門とする人類学部のリネキン教授を痛烈に批判したのだった。アジア太平洋研究の拠点であるハワイ大学は象牙の塔ではなく、人類学者は同じキャンパスに研究室を持つネイティブの学者からいつ異議申し立てされるか分からない状況にあった。

ポストモダンの構築主義

このようなネイティブの側からの批判に対して提示されたのが「ポストモダンの構築主義」と称される構築主義である。それはネイティブの伝統観だけでなく人類学者の伝統解釈をも脱構築することで、人類学に不可避の「語りの権威性」を回避することを目論んでいた。ネイティブの頭の中であれ人類学者の頭の中であれ、「文化」は構築されると主張することで、両者の「文化」を同じ地平に据えたのである。

しかし、ポストモダンの構築主義は、文化の「本質」とされるもの全てを無差別に脱構築してしまうため、ネイティブにとって自明のものとされる「血」や「土地」に根ざす「根源的な心情」も構築物と見なしてしまう。文化アイデンティティの形成にとって大切な「根源的な心情」さえ解体し、ネイティブが自らの文化、価値観、アイデンティティに対して持つリアリティまで脱構築してしまうのである。その結果、ポストモダンの構築主義は脱構築主義的な視座と「良き人類学」の実践をどう両立させるかという難問に突き当たることになったのだった。

ポストコロニアルな状況において、文化構築に関する理論的論争と文化表象を巡る政治学的論争は複雑に絡み合っている。「良き人類学」を追求するために「文化」の脱構築という作業を停止すべきかどうかについて、冴えない対話を始めねばならないというリネキンの嘆きともつかぬ指摘が、ポストモダンの状況における文化構築主義の窮状を示していたと言える。